
恋愛人生。

さやたそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛人生。

【Nコード】

N9997H

【作者名】

さやたそ

【あらすじ】

高校2年生の冬あたしの恋愛人生が大きく変わり始めた。これは運命なの？男性を信じないと決めた紗也の恋愛人生 あなたに出会わなければよかった あなたに出会えてよかった

プロローグ（前書き）

事実をもとにした話です。ぜひ見てください。

プロローグ

二度と恋なんてしない。

そう決めた高校2年生の冬

また同じことを繰り返

返そうとしてるのか

それともあなたとの

出会いは運命なのかな？

まだわからない

将来の恋愛人生。

初めて・・・

あたしは中学3年生で
初めて男子と付き合った

最初は軽いノリだった。
でも毎日一緒にいて
学校の階が違う2人は
休憩時間になるといつも
階段で話をして
チャイムが鳴ると
キスをして戻っていた

放課後はいつもの公園で
語り合い紗也の子供が
欲しいなんて言われて
夢見ていた

家まで送ってもらい
いつも濃厚なキス
ついていけないくらい
舌を動かしてあたしを
火照らす

息がしにくくて
深呼吸すればいつも
にかッと笑う笑顔が
可愛かった暑い夏がくるころ
2人乗りの自転車の後ろで
急に言われた

『 紗也、エツチしょ 』

最初は嫌がった
でも誠一はもっぱらの
女好きで浮気性。
本当は焦っていたんだと
思う。

本気で好きに
なっただって初めて
気づいた

お互いの家に行けない
2人は誰もいない
保健室で結ばれた。
ドキドキした
他の生徒にバレない
心配もあつたけど
全てを誠一に見られる。
それがなんとなく怖かった

ずっと手を繋いでくれた。温かくて心地よい
もちろん処女のあたしには
痛くて涙が出た

『 大丈夫 』 っ て耳元で
ささやかれて安心したんだ

自分でもびっくりする
くらい声も出た
口塞がれてDMなあたしは

余計興奮した

それから公園や学校の
トイレであたしたちは
繋がった。

いつもいつも

気持ちよくしてくれた
心も体も

信じていたんだ

2人はずっと一緒に

いられるなんてあたしは
まだまだ子供な考えでした

中学3年生の秋

あたしたちは別れました

原因は誠一の浮気。

もう堪えれなかった
好きだから怖かった

さよなら、ありがとう。

誠一

涙と思い

中学も卒業して
あたしは高校生になった。

高校に期待はして
なかった。だって
女子校だったから

でも思ったより
恋はできた
色んな学校の男子生徒、
働いてる会社員

その中で高校1年生の夏
またあたしは恋をした。
同じ年の祐介。
部屋に行つては騒いで
毎日まめに連絡を取つてた

付き合つてもいないのに
キスをしてエッチをした
幸せだった
あのとしまでは

放課後1人で帰つて
いるといきなり頭に

何かがぶつかってきた。
振り返ると祐介の学校の
制服を着た女子が5人。

すぐにわかった

祐介も女好き。

あたしは本当に

男運がない

どうしてこんな奴

ばかりに出会って

好きになるんだろう

5人の中に中心的な
人物がいた。

その子は私が祐介の
彼女だと叫んでいた。

そんなこと知らなかった

また裏切られた・・・

一瞬にしてそう思った。

囲まれたあたしは

逃げることもできず

胸ぐらをつかまれ

殴られた

痛みより裏切られた
ことのほうが強くて
ショックだった。

頭の中で何かが
プチンと切れた気がした

気がつけばあたしも
胸ぐらをつかんで
叫んでた

自分で自分が
わからないくらい、
頭ではどうして？
その言葉がぐるぐる
まわった

祐介の彼女だと言う女を
強引に祐介の前に
連れていった。

『根性入れるよ』
そう言つて祐介の腕に
たばこで根性焼きを
してやった

家についたあたしは
辛くて死にそうだった。
自分が醜く感じた。
初めて自分にリスカと
根性焼きをした。

同情でもいい
だれでもいいから
あたしを愛して

あたしを愛して

このときからあたしは
寂しさを消すために
色んな男とホテルに
行っでは抱いてもらった

その温もりが思ったより
安心できた。

心の中で自分を
汚い女と呼ぶように
なった

誰か本当のあたしを
愛してください

感謝

祐介のこと以来、あたしは恋をしないようにしてた。

友達といることが

楽しくて女友達と

ばかみたいに毎日

一緒にいた。

夜や友達がつかまらないときはいつも寂しくて男の人に抱いてもらった。

おじさんとも寝た。

お金をもらって満足した。

それでも心の中のもやもやは消えることはなかった。

友達にも彼氏ができはじめてなんとなくうやましかった。

自分にはない恋愛

2年以上続いてる子や

付き合いたてで

戸惑う子。

可愛く見えた

みんな幸せそうだった

毎日、平凡な時間を
過ごした

あつと言う間に
高校2年生になった。

そのとき仲の良かった
沙季という細くて
モデルみたいな体型で
とても美人だった子

あたしとどこか
似ていた。

恋愛の仕方、
好きになるタイプ、
辛い体験

だからすぐに
仲良くなれたし
話もいつも合った。

そんな沙季にも
好きな人ができた。
Wデートの誘いがきた
あたしは久々の普通の
デートに少し不安を
覚えた。

それでも好きとか

異性とか気にしないで
遊べることがあたしに
とって安心だった。

『紗也ちゃん、彼氏は？』

『いないですよ』

『作らんの？』

『今はいいです。』

付き合ってもいいこと
ないし、男の人信じ
れません』

こんな会話をした。

『本当に好きな人が
できたとき、自分が
好きになっただって
気持ちわからんよう
になるで』

そう言われた。

『どんだけ恋に失敗
したって本当に想っ
てくれる人はおるよ。
まだ高2やろ？
まだまだこれからやろ。
頑張れや』

今日初めて会って
何も知らないあたしを
この人はみすかした。
大人の男の人だなと
思った。

ありがとう

その日からなぜか
手を切らなくなった。

そして、その次の日

『誰か紹介して！』

久しぶりに言った

言葉だった。

あたしはあの言葉と

持ち前のポジティブ

に何かがぶつ飛んだんだ。

沙季も告白して

付き合えるようになった。

羨ましいとかじゃなく

自分のことのように

嬉しくて抱き合った。

どうして・・・

高校2年生の秋、
初めて年下の男の子を
好きになった。

一つ下のイケメンで
バスケット部で大人びて
見えた。

もちろん優しくくて
でもすぐには信用
しなかった。

知り合って1か月
『付き合って』と
言われたあたしは
考えた。

深く入り込むことが
怖かった

あたしは好きな人や
彼氏ができたら

すぐに信用して

一直線になる

まわりが見えなく
なることがいやだった。

そうして失敗
してきたからだ

でも好きな人に
付き合つてなんて
言われて断ることが
できなかった。

返事はOK・・・

初デート

年下のくせに生意気で
あたしのほうが年下
に見えたんだ

場所はカラオケ。

歌がうまくて
もつと惚れた
ドキドキしたのは
久しぶりだった

あたしは潤と初めて
キスをした

心臓が飛び出そう・・・
色んな男とキスや
エッチをしたけど
こんな感情になったのは
久しぶり

そのまま胸を触られた
心地よい
あたしは流されて

しまった。

その場の感情に
反抗できなかった

信用とかそんなの
今はどうでもいい・・・

あたしを少しでも
好きでいてくれたら
それでいい

やっぱりバカだと
思った。

いつも同じことの
繰り返し

今度こそ、今度こそ、
なんて考えている
あたしはいつになったら
大人になれるんだろう？

潤の指が下に入ってきた
初めてでもないのに
なんだか怖くて潤の手を
にぎりしめた。

ぎゅってにぎり返して
くれた手がとても
愛しくて安心した。

『痛くない？』なんて
優しい言葉をかけて
くれたっけ．．．

カラオケの部屋は
声が響いた

もうそんなのどうでも
いい

だから早くあたしを
愛して、あたしを見て
そんなことを考えていた。

それから潤の連絡は
途絶えました

涙と笑いが込み上げて
きた。

あんなに好きだと
言ってくれたのに．．．

神に見放されている
って思った

年下にまで騙されて
あんなに好きだった

カッコ悪い自分。

顔が見たかった

探して、探して、
いつも潤を思つた

本当に好きだつた

家に帰つてあたしは
また手を切つた

社会人の男の人と

エッチをした

『好きにして』

もうぬけがらだつた

声も出ない、

気持ちいいのかも

わからない

そいつも彼女がいた。

初めて浮気相手になつた

本当の彼女の気持ち

なんて今のあたしには

どうでもよかった

ごめんなさい

どこまで腐つてるんだ、
あたしは。

紗也のココロ

あれから、一人じゃ
いられなくなった。

色んな人に
泣きついた

恋はしたい・・・
でももう怖い・・・
男はみんなそうなの？
何を考えてるの？
あたしにはわからなかった

高校2年の冬が
やってきた
寂しいクリスマス
好きでもない男と
交わりあった。
寒い公園で2人
暖めあった。

『紗也は体きれいだね』
《そんなことない》
『でも心は少し歪んでる』 《そうだね。でもあんた
に何がわかるの？》

一緒にクリスマスを

過ごせる人がいたのに
寂しくて寂しくて
帰りの電車、一人で
泣きまくった。

あたしの話を何でも
聞いてくれる亜衣に
電話した

やっぱり女友達の方が
落ち着く

最初は女子校なんて
嫌だと思っていたけど
女子校で良かった

家に帰ってリスカ
する毎日。

これはあたしを
守るもの．．．

あたしを探して
くれる目印．．．
生きているという

実感．．．

いつも姉と比べられる
できの悪い妹のあたし。

家にも居場所がない

1階から聞こえる

姉や両親の笑い声

2階で過呼吸に

なりながら泣いて

いる自分

誰もあたしの存在に
気づいてない

あたしはここだよ？

みんなはどこにいて
どこを見てどこに
向かってるの？

あたしはどこに
たどり着けばいいの？

冬休みは一人で
過ごすことが多く
なった。

男に会うのも
面倒になり始めた

沙季はあたしを
気遣って買い物に
誘ってくれた
とても嬉しかった。

あたしは二度と
恋なんてしないん
だろうなって思ってた

運命なんてないし
あたしを本当に

想ってくれる人なんて
いない

一生独りと
決めつけていた。

あの高校2年生の終盤
はつきり覚えてる。
2月までは・・・

高2の冬・出会い

冬休みも終わり

また学校が始まりました。

1年過ぎてても

何年過ぎてても

何も変わらない。

初詣・・・

あたしに素敵な

出会いがありますか？

神様にそう聞いた

あたし、もう

開き直ってた

どうでも良かった。

色んな男とメール

した・・・

全然楽しくない

そんなとき同い年の

違う学校の女の子

純奈と出会いました

クラスが一番

かっこいい男子を

紹介してくれた

でもメールは来なかった
こんなもんか
そう思ってた次の日
知らないアドレスから
メールが来た

フルネームで丁寧に
自己紹介。

めずらしくて

なんだか笑えた
^{ひとし}齊って

漢字が読めなくて
聞き直したつけ

すぐ仲良くなった
斉くんは積極的だった
電話で朝を迎えた
色んな話をした。
声フェチのあたしは
声がかっこよかった
のが一番の印象。

すぐに会おうって
誘いがきた

でも会うのが
怖かった

『考えさして』

これがあたしの返事。

こんなにすぐに
気になる人が
出来たのは初めてだった

優しい言葉をかける
彼が怖かった

《ど・せ口だけ》
恋愛に関して歪んだ
あたしはそうしか
思わなかった。

でも違う
本当はだんだん
斉くんを好きに
なるのが怖かったんだ

会っちゃいけない
って思った。
こんなにすぐ
人を好きになる
自分はとうとう
おかしくなつたと
思った

沙季に相談した
沙季は笑いながら

あたしにこう言った
『好きになることは
いいことだよ？』

すぐに信用できる人
なんていないんだよ。
出会って時間を重ねて
そして相手を知って
いくんだよ。

紗也は恋愛が下手だと
思う

けど最初から相手の
気持ちを理解する人
なんていないんだよ』

『後悔だけはすんな』

そう言った。

カラオケで泣いた
いっぱい泣いた
たまっていたものが
出てきた

その夜、斉くんに
『会おう』って
連絡しました。

運命の日

2月14日

バレンタインデー

あたしには関係ない
イベントも今年は
違った

斉くんと会う日は

2月17日

あたし始めて
自分からちゃんと
告白しようと思った

お菓子作るのは
苦手だから
チョコは買った。

2月17日

あたしの人生が
大きく変わる日
駅での待ち合わせ。
どこにいるのか
わからなくて
電話しながら
探しあつたつけ

見つけて

二人して緊張
でも会った瞬間の
気持ちはつきり
今でも覚えてるよ

映画見て手繋いだ
斉くんの手はすごく
汗ばんでた。

『ごめん、緊張して』
何度もごめんって
謝ってきた。
ついつい笑ってしまった

映画を見終わった
あたしたちはカラオケ
に移った

『歌うまいね』
そう言ってくれた。

恥ずかしくなって
歌うのに集中した

ぐいッ

後ろから抱きしめられて
キスされた
あたしの心臓は
飛び出そうで
ピークに達していた。

『付き合っ
て』
返事は『うん』

信じてみたい

これが本当の最後だと
自分に言い聞かせた

そのまま押し倒された
けど齊くんも緊張の
ピークに達していて
起たなかった

こんな人初めてで
情けないとかぢや
ないく可愛く感じた。

最後にプリクラを撮った
あたしから告白する
つもりで用意してた
チヨコ

そのことをちゃんと
話してチヨコを渡した
『まじでツ!?!』
すごく嬉しそうに
照れてた

『ありがと』
周りに人がいるのに

階段でキスしてくれて
今日の初デートは
終わった。

2月17日

これからあたしたちの
間に色んな事が起きる
なんてこのときはまだ
考えてもなかった

後悔してるのか
これで良かったのが
まだ答えは見つけ
られない

泣いて、笑って、
怒って、初めての
色んな感情が湧いた

あたしを変えた
あなたを変えた

《運命》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9997h/>

恋愛人生。

2010年10月13日23時57分発行